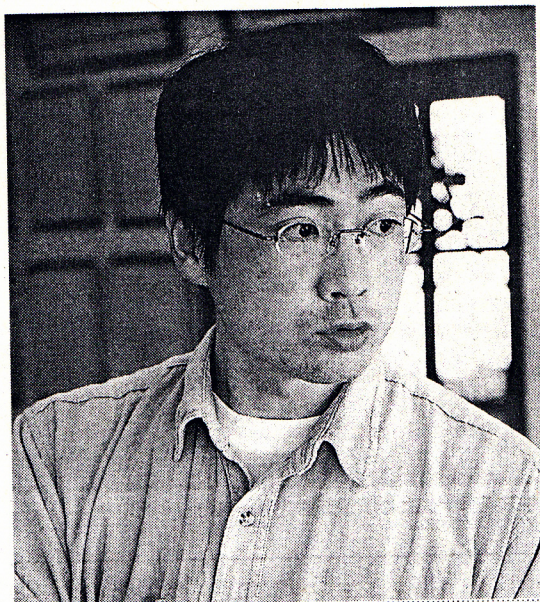


熊本 バガワ横丁



小説家 宮本 誠一

◇みやもと・せいいち 1961年荒尾市生まれ。阿蘇町在住。北九州市立大國文科卒。小学校教師を経て95年から小規模作業所「夢屋」代表。98年「真夜中の列車」で部落解放文学賞、「ウォール(=壁)」で県民文芸賞小説部門一席、99年「水色の壁」で部落解放文学賞を受賞。

阿蘇郡一の宮町、阿蘇神社の近くにある障害者の小規模作業所「夢屋」。ガラス戸を開けて入ると、奥のパン工房から宮本誠一さん(40)が快活な笑顔で迎えた。宮本さんは七年前に小学校教師を退職してこの作業所を開き、現在まで代表を務めている。

宮本さんは、障害者をとりあげた小説をいくつか書いています。その一つ『真夜中の列車』は、教師を辞めて小規模作業所を開いた男が主人公。障害者自身の障害者差別観、障害者の愛

と性といった現実をストレートに描き、健常者と障害者が共に生きる道を探った。

「あまりにも障害者の現実が知られておらず、伝えなくてはと思った。健常者と障害者の関係を描き、その間に何が生じるかを伝えたかった」

共に生きる道を模索

人のかかわり合い描く

人と人のかかわり合いこそが自分の小説のテーマ、と宮本さんは言う。普遍的な命題だが、宮本さんの口から聞くときさらに切実に聞こえる。世間一般のバランス感覚を拒絶する、その精神の強さゆえに人間関係の厳しい葛藤(かっとう)を経てきた

立する。土台から自分の居場所を立ちあげていかないと、僕と僕を一番理解してくれた。僕が人間として初めて関係をつくれた相手だった」

「突っかかりたり暴力を振るわれることもあったが、猛が僕を一番理解してくれた。僕が人間として初めて関係をつくれた相手だった」

彼らとのかかわり合う中で教えられたことは、すべての人間関係に生かせる、と宮本さんは言う。小説で人のかかわりを描くことは、ロールプレイングの意義も含んでいるのだろう。

大学生のときから小説を書いていた宮本さんだが、最近になつて行き詰まりを感じるようになった。

人だからだ。子どもたちとのかかわりを求めて教師になった。しかし何事も率直に考えを表明し、器用な立ち回りを嫌う性格。学校という世間になじめず、自分らしさが損なわれてしまうような危機感を募らせた。さらに県内一斉の個人学習診断テストに一人反対し続け、いよいよ孤立してしまつた宮本さんは退職を決意する。

「子どものころから自分の居場所がなくて悶々としていた。社会に入り込めないから当然孤

「夢屋」を開設。文字通り土台から立ちあげる、宮本さんのための場所でもあった。

「(読者の眼で自作を読んでみると) 宮本誠一という作家はいま、精一杯のところに來てるなと思う。『真夜中の列車』を書いたときに(新しい井戸)を掘り当てた感覚があったが、思えばそれが終わりの始まりだったんでしょ」

「うそも何もない、そのままの存在として生きている。人間の表面にくっついていっているものを一つ一つはがしていつて最後に残る原質が、彼らなんです」

下原さんは二年前に二十四歳の若さで亡くなり、宮本さんは最大の理解者をなくした。

積み上げてきたものを、思い切って捨て去る時期に來ているようだ。「今までの作風を百八十度変えてみたい」という宮本さんは、(児童文学作品を書く)という公約を掲げた。